の地域に入りこみ、支配する。隣人はしげしげ敵だ。敵の不幸もまたおのれの不幸という考えは、仏教のしたらしめたもので、おそろく、わが古代においては、敵の不幸はわがよるこび・すなわち、隣りの哀に相せぬ感情はきえ、風習はかわる。

「もつと」し、征服者も、被征服者の土地に住み、支配するためには、土地の風習を根こぎにするわけにはいかぬ。それでは被征服者も心休せぬ。そこで征服者が、土地の風習の中から都合のよいものを選び、これを権力によって有利な体系に組みこんで制度化したものの一部が「礼記」だ。
昌谷が「いまなお「春くに相せぬ」のは、政治家の教化などによるのではなく、昌谷の風義が政治の退廃にも浸蝕されなかつた」ということだろう。

60 疾病無邪祀 病むときもまがたま祀かず
61 鮫皮識仁恵 老いびとは恵みかなし
巴

巴董「そういえば、長安では病人が出ると、道士や坊さん、おがみさんや新興宗教の先生を招いて、二祈禱しますが、昌谷ではあまりそういうことではやりませぬね。これもこの里の風義ですか」

「そうだろうな。古いむかしのことには、わがらぬことが多くから、しかとしたことはいえぬ。が、一つの氏族、一つの民族は、はじめはその祖先神、それには、太陽であったり、大地であったり、蛇であったり、キツネであったりしたのだから、どこか自分たちの発生の起源と考えるものを信仰崇拝していたのだから、そころがそれら氏族や民族を征服し、征服される過程で、征服者は、おのれの神を正統神とし、被征服者の神を邪神として追放するか、眷属神として正統神の下位においた。そこららの消息は「孔子家語」の「弁物」あたりから推察できる。儒教では、天と地と家祖を祭るのを正しとするが、中国人の信仰形態がそんなどころにあちついたのは、せいぜい周代のことだろう。しかもすでに周代にその信仰がくすねはじめたこと、先秦の書の賸処にみえる。

政治家は、信仰を利用する。権力を握るための手段として、かわらんと、ては、信仰の正統性など、じつはとらやましいことなのだ。都合次第で、邪神、とだ、て手を握る。正統の神は敬して遠ざけてお

けはよいのだ。信仰についてもうただから、礼樂であろうが、學問であろうが同様だ。儒教を國教にしたのは漢の武帝だが、その武帝が、道士に祈らせたり、不老長生の薬をさがさせたりした。仏教をはじめに受容したのは、後漢の明帝だといわれるが、眞実の教之に対する傾倒からではなく、奇異な幻術へのあこがれからだ。たと見るほうに、事情だろう。

権力者はおのれの利用できる神を正統神とし、利用できぬものを邪神とよぶ。新来の異神が権力者のいる都会に集るのは当然だろう。都會では、やがて田舎の神を邪神とよぶ。昌谷の人は、病氣になつても、金のかかる都會の神は招けぬ。土地の神さまにすがりつくほかはない。お返しに、都會の神を邪神とよんだ。邪神をまつらぬのは、昌谷の風義だろうが、政治家たちに都會のいい道義かどうかは、わかぬ。儒者どもは、孔子の教えがここに、ある、というだろう。だが、人民を「小人」とよび、支配者にとつての「使い易さ」を目安にする孔子の教えと、昌谷の風義とが、同じものでありうるかどうか。巴童「儒者というのは、理屈をつけてなんでも我が田に水を引く人たちらしいですわ。フタの皮みたいなおじいさんやおばあさんが孫どもを可愛がるのも、それでは孔子の教えになつてしまふのですか」フタの皮、か、こいつは面白い。そのままのことばがあつて、鮎皮という。鮎がフタにあたるだろう。サメだという人もある。いすれにしても、老人の皮膚の形容だ。お前のことばを役人なら、そうだなあ。「鮎皮誠仁惠」とでもいうかな。

巴童「役人ことばも、ちよつとイカしますね。童話に出てくるさかなの先生みたいです」

62 卍角知靦恥
63 縣省司刑官

幼きも恥づるを知れり
人裁くつかさ用なく

賀

老人がフタの皮なら、子供はツノ髪だ。

巴童「なるほど。ツノ髪の子供が叱られてベソをかいてる、なんてのは可愛いものです」

わたしの番だが、お前のことばをそのまま「卍角知靦恥」としておこう。文字の視覚的形を応用した点では、さきの「立馬印青字」と双璧だろう。

巴童「世の中にはひとの考えやことばをぬすむ学者・文人が少くないと聞きましたが、先生は惜しみなく、わたしの考えに形を与えてくださるのでさるのですね」
そうさ、村の人たちがみなわたしみたいになつたら、警察もいらなくなるだろう。

64 戸乏爺租吏 税吏おらぶことなし 巴
65 竹藪添墮箇 たかむらに竹の札とり

巴童「おやおや、ちよつとほめるとあだからなし
なんだ、なにをぶつぶついつてゐるんだ」

巴童「わたしもほとんどん考えをみついでいます。村の人たちがみんなわたしみたいになりました、
税務署のお役人も、納めるおさめると、一軒一軒となり歩くこともいらぬわけ。そうなれば、せつかく
お暇になつた先生が、役人のアラさがして向う腹たてる必要なく、竹やぶの竹でもとつて、古い巻物
の補修もできようというものです」

66 石磯引紐餌 磯べにて魚くづ釣れば 頁
67 溪灣轉水帶 溪ひらけ流れ帯存し

こいつめ、だが、いう通りだ。石ころだらけの磯べでも、釣り針をなげれば魚が餌を引く。

巴童「魚が素直すぎるのか、餌がとぼしすぎるのか」

お前の口の悪いのも相当なものだ。わたしは素直でいいよ。ありのままに見る、それが楞伽經の教え
るところだ。

巴童「ありのままに、何をこらんになりますか」
溪の入江をみてみる。水の帯がけつたりうねっているではないか。

68 芭蕉頰蜀紙 紙のごと芭蕉かたぶく
69 岑色晃穀黍 岑の色之りに似て映え

巴

芭童「くねる入江と大きく『惱公』で先生がおうたいになったなまめかしい句を思い出します。するとあの傾いた芭蕉まで、ながあいながあい恋文をしたためた蜀紙にみえてくるからふしぎですね。そして光さおびた峯のいろは美しいお方のうすぎぬの襟みたいです」

70 猿蓑松数事 夕日ひとつわづらひ私ふ
71 泉樽陶宰酒 泉の樽に陶宰が酒

芭童がいやしいわね。しかもそれをわたしのせいにしてしようとする。ただひとつおちてゆくあの日を見よ。孤独な光に世のもろもろのわすらわしさをふり払おうと思っているのだ。泉をみよ。そこに湛えるものはまさに陶淵明の酒だ。
芭童「先生の淵明ずきはわかりますけれど、五柳先生といわずに、陶宰だなどと彭沢県令をほのめかす。まだ役人生活に未練がのこっているみたいで、泉の樽のお酒、どうやらにがそうですね」
わたしの見つけた泉の酒にケチをつけるお前は、それではいったい何をもち出すつもりだね。

72 月眉謝郎妓 月の眉は謝氏が歌姫
73 丁丁幽鐘遠 たうたうと鐘はるかにて

巴

芭童「山ざわにちらりとのぞく月。謝安どのが東山の遊びにつねに携えたという歌姫の眉」
お前は今日はいんに色気づいて、何かというぞれだ。謝安は晋の大貴族。唐の夫業官吏の召使いがかれを氣どるのは、嗜飯ものだ。
芭童「わたしが氣どれば、たしかにおっしやる通りでしょう。先生に、ちと、かれののほほんぶりを

見ならうていただきたいと思つたのです。かれが貴族なら、先生も貴族です。しかし、貴族であるうが
賤族であるうが問題でない、と口先生が教えてくださったこと。そうしてこれも教えていただいたこと
ばかりですけれど、かれは、初めは辞退した官職に、後には就いて、一生そこら離れられなかったの
ですわ。いろいろいきまづはあつたにしても、二十歳そこそこで人の羨む中央の官受になり、あしかけ
三年、いやになつたといつてさつさとやめ、山の中に引こもつてしまわれ先生の思い切りのよさは
謝どのの及ぶところではありません。長安の都では、天子さまはじめ大官がたの馳っけい話題が多すぎ
るので、人の口にはのぼらなかつたにしても、先生に浮いた話のないではなかつたこと、胸に手をおあて
にならなくてもごぞんじのはず。それなら、わたし相手の贈句の至だけで、道徳先生みたいな類をなさ
らなくとも、幻の美女を大いにまねいてお遊びになつたらいかがです。それとも、女几山詣での帰りみ
ち、神女さまのやきもちが、こわいのかな」

カのお音も出んよ。
巴重「ごおんごおん。遠くのお寺の鐘が鳴つてます」

74 矯矯単飛至
75 霞嶽殷差我

はたはたとひとつ飛ぶとリ
夕焼けにけはしき岳や

賢

わたしはひとりで逃げ出すよ。たかあくたかく天にも至ろうとするあの鳥のように、夕焼けの山のけわ
しいすがた、帰り道と知つたら急に威丈高になつた巴重みだいた。

76 危溜聲争派
77 淡蛾流平碧

おちみづは声あらそい
碧の水の面やまかげ流れ

巴

巴重「高みからほとばしる落水の音が、その鳥と競走です。でもあまり追いつめるとお気の毒。わた
しは淡くまけ墨はいた美人のような山かげと、平らな碧の水面を、ゆったり流れくだりましょう」

78 薄月眇陰悴。
涼光入澗岸。

むらくもを出づる月詠
岸てらし光すずしく

賢

「浮雲ひろがりて蔽暗すれば月をして光なからしむ」とは、じつに的確だな。だがその浮雲の無慚さ、も、いっまでも続くわけのものではない。みる、あの村雲のかけからほのかにのぞいたお月さま。みる、みる。深しい光が谷の岸べにさしとおる。

50 靜巖山中意。
漁師下網繼。

山田のこころほがらや
漁師の子ら夜の網うつに

巴

「巴」のあゝ、じつにたのしい山歩きでした。すっかりへこたれた先生も、どうやら、息をふきが文藝的なことで、おめでたいことです。でも先生、谷口を出たからといって、油断なされると、ほら漁師の子ら、夜の網をうっていきます、からめとられないようにお気をおつけになつて」

32 霜禽啼樹如。
鏡在浮海みづち凝し

霜鳥は羽ばたきしぐき
鏡在浮海みづち凝し

賢

霜のようになるとい水鳥は、煙のようなしぐきをあげて、羽ばたき翔ける。

「巴」いさぎよきそのお口ぶりですが、さきの眇陰悴といい、ここの疎煙如といい、どうもおかしなことはです。詩人の先生はことばの専門家、その方にこんなことをいうのは奥の程しらすですが、さのうからのお蔭で、詩句もすくんでしまったのでは」

鏡のよつな海に任んでも、いやらしい欲ぼけ何處になつて昇天することをしらぬ。純白の詩人のたましいがイデアをしとめて身もたえるのを、そつとうかがう蚊めが、ふんぐり口をあき、だらだらよだれを流している。

84 浮珠喰魚戯
85 嵐松瑤匣琴

珠浮けて魚をあげどふ
松に來て琴はおほこと

巴

巴 鹽「聞くがろうがいやらしかろうが、とにかく咬はどっかりと水の底に居すわって、そのよだれで之水面を滑らかにしています。ところが小さな魚がパチパチパチと騒ぎたてはわまわり、アッフアッフと泡を吐くのは笑止です。でもまあそれも可愛嬌、空を空泡でも遊珠にみえたら、刹那の眞実。その虚仮をありのままに染しむのが、先生のおっしゃる楞伽經の玄義かもしれません。わたしは、そんな手数もかけずに、松吹く風を、玉ちりばめた大琴と聞いて、うそぶくことにいたしました。少しは引き立とう。嵐松といい、瑤匣といい、まさに月並のお手本だ。せめて風潮とでもすれば、少しは句も引き立とうに。」

巴 鹽「身体を働かせて生活するものは、月並をいとわぬものです。土をすくに、からわぬ形の鋤、木を切るのにむた力をどらぬ形の斧を、百姓や木こりはきぶでしよう。それが月並というものです。先生だつて、おられることは、時に雅俗をえらばぬ、それらを組合わせた空谷が新しい眞実を示しさえすれば、いつかおっしゃったような気がします。その俗というものが、月並のことで、何れありませんか。もしそうなら、先生の自語相違、などというのは理屈、ぼすぎますかね。それよりどんな奇句を次にお出しになるか。まずお手並を拝見いたしましょう。」

百証文をもち出して、わたしを牽制しようというのか。だがその手はくわぬ。

86 替置錦城使
87 柳綴長纒帶

替きらぬき天馳せ使
柳つづるはなだの帯や

賀

どうだね。これはまた月並存、と聞いたそう存お前の顔を、鏡にうつして見せてやりたいね。キッキのことばの手前、義理にもさうはいえぬだろうが。

巴 鹽「そんなことはどうでもよろしいが、錦城の使というのはなんですか。」

錦城は蜀の成都の異名。山や川が錦のように美しいから、とも、すぐれた錦の生産地だから、ともいう。錦城の使というのは「後漢書」方術伝にみえる次のような話にちなむ。

李邵は冀中南鄭の人だ。學者の子で、太学に遊び、五経に通じ天文地理にくわしかつたが、外見樸朴で、人はその才能を識らなかつた。県の候吏（賓客接待係だ）になつた。当時、和帝が即位したばかりだつた。宥使（宥旨のこと）をつかつて各地の情况进行を偵察させていた。その二人がやつて来て、何くわぬ顔をして李邵の官舎にとまつた。折しも夏の夕べ、露台でいっけいやった。李邵が天を仰いで、さて二人に問う「お二人が都をお立ちになつたとき、朝廷のお使いが二人お出になりませんか」二人、顔を見合せていう「そんな話は何もありませんでしたが、なぜ知つていらつしやるのですか」邵が望を指していう「使い望が益州の分野に向かつています。それでしょう。それでわかつたのです」益州というのが蜀だ、わが弊國公も益州大都督なることは、お前も知つてゐるだろう。

巴壘「それじゃあ、いま飛んだ壘を、その忍者星とやらだと、おっしゃるのですか」

壘はやさしい、やさしい壘を、星は美しい、美しい形をしている。だが、美しい星にも、人の秘密をさぐるものがあり、やさしい壘にも、人のアラをさがして歩くやつがいるかもしれぬ、ということだ。

巴壘「わたしにあてこすつておられるのでしようが、ゲスのカンクリですわ。わたしがかかりに忍者だとしても、地上の権力の手下ではなく、天帝の忍者、すなわち天駝使、先生がつまりらぬことに頭をつ

つこまてに、新しい詩を一行でも多く書かれるようにと、監視しているのです。うが、ご親切なことだ。柳の糸を綴つて長いはなだ色の帯でも織り、いまの一行をしたため、おれにおくる

88 錦城短歌
89 石根縁糸辭

竹村はららぐ短歌
石根めぐり辭みづみづく

巴

巴壘「そなたにくてはいけません。もともとやさしいわたしです。そんなふうにおっしゃると、オ

やぐ竹村のようになつてうれしく揺れ、息吹をふくんだ小笛のように、先生を譏笑したくなります」

90 蘆菊抽丹漬 二ノリエに蘆の芽のびぬ
91 湯焚拜天影 湯巻は天をうつして

すこし甘い頬をするとつけあがる。濁った水からつき出た青い蘆の芽みだいた。お前がわたしにからかうのは、あのあちつきのない湯巻が天の影をうつしているみたいなものだ。

92 古槍撃壽醫 槍のこす文書をつかめは
93 逐月被帳紅 月あかし藟薇のとばりに

蘆の芽なんぞじゃありません。古代の槍。ほら肩の梢が、雪のうでをしゃつかまえました」
そんなことをいってほぐらかす。いったいお前は何をいいたいのかね。
「何一銃が現実と非現実の境だと、先生はいつもおっしゃるではありませんか。それならせつかく湯巻がうつした天で、どんな病が進行しているか、こちらになんて聞いてみよう。さっきまで悲しそうに病を患っていた月が、藟薇のカーテンには、たら、ほあ、と紅くなっているでしょう」

94 雪雲奪剝 雪刺してはしきトゲかな
95 芒麥平百井 麥の穂は六田になびき、

また色気の対照をもち出した方。藟薇はやさしくても匂うトゲをもっていて、いやらしい雪をかからめとり、ぐざりと突き刺す。わたしたちの道も、そこでおしまい、きっちり、きのうの出発点に帰った。

わたしたちの立つの口、同じ地矣だ。だが、わたしたちの目は反対の方向を見ている。きのう見た本
田の橋といふ見る就田の寺と、それは方向の遠いがわたしたちに教えてくれる風景のちがひだ。いや
方向だけではない。千のうは朝、いまは夜。大陽にたざされて、橋の月はいすじ一すじの青まで見え
ひかれたが、月を浴びると、鏡いんぎをもつ事も六田になびいて、什里四方が、いまの平らな鏡のよ
うだ。

補田の水鏡をくぐって、鏡のむこうに楞伽の幻城を求めてのこの道達だ。だが、寺田の大鏡をくぐ
り鏡のこちらに帰ると、そこには、幻よりも幻めいてあだやかな昌谷の里があった。

96 阪東列千肆 畑めひて壘形つらなる
97 刺尻城紀人 あくせくと成紀の人よ

巴壁一夜になると人、千ひとり通らなむ昌谷ですが、田畑がひろがり、それをふちどって家がつらな
り、そこにはさまざまの店もあって、里の人口よそのまちに出入くともともかく用もたせ、それが、見
るものにもおのずから見え、のんびりとゆたかな感じですよ。出は田でよるし、いけいけと、そこに住めばま
たそののわすらわしさもありません。他人といえは名は高尚ですが、岩の床に寝かすらのしとわ、常
人には想えられそうにありません。諸縁放棄の出家というのも、思いつめすぎたように、趣きが乏しいよ
うです。といって成紀出身の李氏なる先生が、おなじ成紀の出の人の下で、あくせくと没入生活をなさる
こともありません。

98 好學鴟夷子 あはれかの鴟夷子まなばむ

そうだね。たしかにそうだ。春秋の世に范蠡という人がいた。越王句踐を助けて呉を滅した。句踐は
苦しみは共にし得ても樂しみを分つことのできない人——英雄というのはおおむねそうだが——だ。た
范蠡はそれを見ぬいて、越の国を去り、放浪ののろ斎の国にゆき、姓名を鴟夷子皮と変えた。

巴壘「おかしな名前ですわ、トンビの皮だなんて」

トンビの皮ではない。馬の皮で作った袋だ。酒を入れるのに使った。范蠡は、もと楚の人だ。同じ楚の人で、呉子胥というものが、呉王夫差の謀臣だった。呉王は讒言を信じ、呉子胥を殺し、馬の皮袋につめ、長江に浮べた。范蠡が、馬の皮袋と名のつたのは、あやういところで、呉子胥の運命をまぬかれた男、というほどの気持をこめてのことだろう。馬の皮袋は、大きくてなんでもどっさり詰め込める。用のないときは小さくたんでしまっておける。その出処進退の自在無碍を処世術とする。ここらだと解状する学者もいる。

巴壘「皮袋さん、それからどうしたのですか」

呉王夫差をやっつけるとき色仕掛に使った五雲溪の洗濯女出身の西施という美女をつれて歩いて、しっぺりたのしんだともいいます。実業家になって数千万の富をきずいたともいいます。それを斉の国が目をつけ、宰相になつてくれと招いたが、財を散じて、陶という地にゆき、陶朱公と名乗って、ここでも巨万の富を築いた。ともいいます。

巴壘「これはまた、チャッカリした人ですわ」

かれらはみな霸者の臣だった。わたしも。覇臣。だが、考えてみれば、お前もそうだ。わたしがおのれの不遇をほやいて、お前の辛苦をかえりみないとすると、おかしなものだ。わたしが生産に従事したからといって、范蠡のような大実業家になれなく、お前はいつまでも貧乏のお相伴で気の毒だ。それでも忠言ありがたく、わたしもせめて此妻子の、折られたみ自在の融通性くらいは学んで、あすから、お前と、田でも鋤こうか。

のろのろのつこつと読んできた「昌谷詩」の、拙吟聯句としての展相を、どうやら、辛うじて解きおえた。

本誌に執筆しはじめたのが一九七一年十月一日で、それからほとんど三年。『方向』六に収めた「帰郷」で、これが拙吟聯句であるうといつたのが一九五六年七月五日で、すでに十八年経過した。われな

から、あきれるほどの愚鈍さである。

山の中で、ふと見た仙人のバク子につきあって、壁に帰ったら斧の柄が腐ってしまった。トンマ
や木こりの話があって、中国人はそのトンマを愛する。ウ・アシントン・アーウィンクが同じような話
を書いている。話として口おもしろいが、あわただしい日本の現実のなかのこととしては、間のびし
きる。

年月たっても、軍隊さんの帰還なら、その時間の流れぐあいの異常さが、人の心をうつが、詩の解釈
でけそうはいかず、テレビ劇では、遠山の金さんのお取調べはいつでも「一件めでたく落着」するの
にわたしのほうは竜頭蛇尾、というより、鬼の面をかぶった阿Qぐらいのところで、けなはだ見栄えがし
ない。

八月二十八日の午後四時ごろ、「昌谷詩」の最後の行を解きおえた。仕事場から帰る途中、目さきがく
らんでへたりこんだ。しばらくして立ちあがったとき「日中から酔っぱらって」という声を聞いた。馬
の皮におのれをほりこみドブ川に捨てたくなった。軽い日射病だったらしいが、なんだか、李蕪が、
つまらんことをよせばよいのに、といっているような気もした。

「巖公」や「昌谷詩」を、独吟聯句と見るの口、わたしだけの幻想であるかもしれぬ。だが、とにかく
書きおえた。この痴人の白昼夢をしいとわめ寝寝の読者がある、その清閑を消す玩具の一つの中に
加えてくださることもあるだろうか。

1974.8.31

付記

本誌第六号一頁に、「昌谷詩」の註解者として、鈴木虎雄ら五氏の名をあげ、荒井健氏を書き渡ら
した。荒井氏のもののは発表時からいって五氏に先んじる。

法華經疏草論品の體に入寂可法王、出現世間、隨衆生欲、種種說法、……譬如大雲、起於世間、
 遍覆一切、慈雲金翅、靈光晃耀、雷聲遠震、今衆悅豫、日光掩蔽、地上清涼、雲鞋垂布、如可承攬、
 といふところがある。そこを讀入て、「昌谷詩」の第三十九句から第四十二句まで八日脚掃昏翳、
 別雲密舞、慈雲照靈光、南風送清氣、はここから導出したのではなかつたらうか、と思つた。この湯は
 わが平安朝輸入の法文歌の題并にもよく送られる有るなところ。わたしは少年のころから法華經を誦誦
 し、片に一度か二度は、ここを讀んで来たのに、迂腐なことには、いさ氣がついた。太陽の暑熱を惡魔の
 ように宣傳するインド大陸に生まれた經典のうたう感情と、太陽に親しみをもち中國の詩人の作品がう
 たうそれとは、もとよりひとしくないが、李蕚は法華經のこの偈を眼中に消化して、昌谷詩に流露した
 のではなかつたらうか。李蕚は楞伽經だけでなく、かなり多くの仏教經典を讀んでゐるだらう。といふこ
 とは、たゞなびいたが、何經のどこが、かれの詩のどこに映じているかと問われると、問う人が納得す
 るほどあらわに經文をとりこむところはない。わたしにとつての李蕚のわかりにくさの一つに
 この雲がある。仏教偈として、はずかしい詩である。
 仏教に對するより、靈氣への傾斜のほうが甚しいのではないか、といつた意味のことばを、森頼壽三
 氏から聞いた。魅力的な説だが、みずから検討するかと時局がわたしにはなさそうである。氏の著作に
 朝待したい。

▲雜記・68▼ 柱 環

ことし六月二十一日付メモに昌朝文類(四部叢刊)巻五から、杜康の「吊故宮」を書きぬいてい
 る。

月上銀後椒壁濕	月上の銀枝	椒壁	濕う
飢鳥啄碎琅玕石	飢鳥は啄碎す	琅玕の石	
劫灰飛盡海揚塵	劫灰	飛び尽して	海塵を揚げ
廢殿荒台	廢殿	荒台	土花碧なり
浴陽書生汗梁客	浴陽の書生	汗梁の客	